

「新しい生活様式」とは

【聖書】使徒言行録 8章 1b～8節

その日、エルサレムの教会に対して大迫害が起こり、使徒たちのほかは皆、ユダヤとサマリアの地方に散って行った。しかし、信仰深い人々がステファノを葬り、彼のことを思って大変悲しんだ。一方、サウロは家から家へと押し入って教会を荒らし、男女を問わず引き出して牢に送っていた。さて、散って行った人々は、福音を告げ知らせながら巡り歩いた。フィリポはサマリアの町に下って、人々にキリストを宣べ伝えた。群衆は、フィリポの行うしるしを見聞きしていたので、こぞってその話に関心した。実際、汚れた霊に取りつかれた多くの人たちからは、その霊が大声で叫びながら出て行き、多くの中風患者や足の不自由な人もいやしてもらった。町の人々は大変喜んだ。

【序】使徒言行録の中の2種類の人間の対比

「使徒言行録」というのは、「ルカによる福音書」を書いたルカが、その続編として、イエス・キリストが天に帰られたのちの、弟子たち、また初代クリスチャンたちの生きざま、特にその伝道の様子を記した書物です。それは一面、初代クリスチャンたちの“信仰の戦い”を記した書物とも言えます。しかしそれはとても「静かな戦い」です。腕力や武力で敵対する者たちを打ち破って行ったなどという記事はありません。それどころか彼らは全く無力で、迫害を受けています。

使徒言行録7章には、あの有名なステファノも、大説教のあと、あっさりと殺されてしまっています。そして今日の8章に入ると「大迫害が起こり、使徒たちのほかは皆、ユダヤとサマリアの地方に散って行った」とあります。普通ならこれで「勝負あった」ということではないでしょうか。しかし、実はこのことが、キリストの福音が世界に広がって行く出発点になったと言って良いと思います。使徒言行録は、キリストの福音を受け容れて生きて行くキリスト者たちと、その反対にそのキリスト者たちの存在が目障りで迫害していく者たち、そんな鮮やかな対比がしばらく語られているように思うのです。そしてこの初代キリスト者たちは、迫害を受けても潰されていません。逆にこんな言葉もあります。少し前の5章40節以下です。—「使徒たちを呼び入れて鞭で打ち、イエスの名によって話してはならないと命じたうえ、釈放した。それで使徒たちは、イエスの名のために辱めを受けるほどの者にされたことを喜び、最高法院から出て行き、毎日、神殿の境内や家々で絶えず教え、メシア・イエスについて福音を告げ知らせていた。」

【1】「喜び」があるかないか

「使徒たちは、イエスの名のために辱めを受けるほどの者にされたことを喜び」と

ありました。自分が主イエス様とつながっている喜びです。私はこれが使徒言行録という大河の川底を支えるもの—音楽で言えば通奏低音のようなもの—なのではないかと思いました。「喜び」というのは、自分では作れません。生まれてくるものです。聖霊が彼らの心に与えて下さったものです。

それと対照的に語られているのが、8章のサウロ（のちのパウロ）です。3節に短くこう書かれています。「一方、サウロは家から家へと押し入って教会を荒らし、男女を問わず引き出して牢に送っていた。」迫害者サウロ。クリスチャンと呼ばれる連中を叩き潰すことこそが、神様の御心であると、そのことを生きがいにしていたサウロだったと思います。けれども彼の心に本当の「喜び」はあったのでしょうか？

それに続けてすぐ聖書は、迫害された者たちのことを書きます。「さて、散って行った人々は、福音を告げ知らせながら巡り歩いた」と。最早今までの場所ではもう生きて行けないと、無力で、追いやられるように散らされた者たちです。しかし、少しも惨めな感じではありません。この人々は、“福音を告げ知らせながら巡り歩いた”のです。これは、彼らの中に、福音が生きていたということですよね。福音、つまり、主イエス・キリストが彼らの中に生き、力を与えていた。このお方が私自身を支えていてくれる。どこにであろうが、どんな状況にであろうが、このお方が私と共に歩んでいてくれる。この事実によって、彼らは、そんな状況にあるにも拘らず、心の深みには「喜び」があったと思います。そうです。強く見えるサウロの中に喜びは感じられず、無力にも散らされた者たちの中に、静かだけれども確かな喜びがあるのです。

[2] サマリアへ

さて、今日の8章の1節では、散らされて行った人たちは「サマリアの地方に」散って行ったと、さらっと書いていますが、これは驚くべきことです。今まであまり気に留めてこなかったことですが、とても大きな意味があるようです。そして5節以下にあります弟子フィリポの伝道も「サマリア地方に下って」と、やはり「サマリア」なのです。サマリアへ。一つの理由はそこだったらユダヤ人たちの迫害の手から逃れることが出来ると考えたのかもしれませんが。ユダヤとサマリアは隣同士でありながら互いに敵対視していたからです。でもその中に彼らは入っていったわけです。

私たちはイエス様がサマリアの女性と出会った記事（ヨハネ4章）を読んだり、あの「よきサマリア人」の譬え話（ルカ10章）から、サマリアには親近感さえ覚えることがあるかも知れませんが、そもそもイエス様のそのような事柄こそが革命的な事でした。不幸な歴史的背景もあったのですが、イエス様の時代、ユダヤ人とサマリア人は交際していなかったのです。ユダヤ人は礼拝する場所をエルサレムと定めましたが、サマリア人は、申命記にあるゲリジム山こそが礼拝の場所だと言い、そこに神殿を建てました。しかしその神殿をユダヤ人たちは紀元前128年に破壊したのです。両者の関係は修復出来ないものとなっていました。元々同じ信仰の父祖たちを持って

いる（アブラハム・イサク・ヤコブ・ヨセフ）にも拘らず、です。

この新約の時代、ユダヤ人からすると、サマリア人は神様の契約の民ではない異邦人とみなされていました。「サマリア人」という言葉は、**罵りの言葉**と等しかったと言います。今で言う「ヘイト」ですね。ユダヤ人がサマリアを通過してエルサレム神殿に行こうとしたら、途中で敵意に満ちた扱いや妨害に合うことを覚悟していたとさえ言います。そしてその所に、迫害によって散らされたキリスト者たちは行ったと言うのです。罵りの言葉ではなく、**「福音を告げ知らせながら」**です。なぜこんなことが出来たのでしょうか。—それは、他なりません、主イエス・キリストが既にそのような塀を乗り越えて下さったからです。主は、あのサマリアの女性にこう語りました。「あなたがたがこの山でもエルサレムでもない所で父を礼拝する時が来る。まことの礼拝をする者たちが霊と真理を持って父を礼拝をする。今がその時である」（ヨハネ 4:21、23）。

今、主イエスによって新しい時代が来ている、ということではないでしょうか。迫害されて、自分の生活の場所を追われてしまった彼らも、使徒たちと同じように「**イエスの名のために辱めを受けるほどの者にされたことを喜び、…メシア・イエスについて福音を告げ知らせる**」者へと、聖霊のお働きによって導かれていたのではないのでしょうか。そしてそれは、今の私たちへのメッセージでもあると思います。

自分自身のことを振り返りながら言うのですが、私は、自分あまり差別偏見を持たないような人間だと思っていたところがありますが、いや、そんなことはないな、と思わされています。最近ひどく政治が混乱していて、TV やラジオでも色んなコメンテーターが話をされます。その時、もう自分の中で**レッテル**を張ってしまっているのです。例えば、ああ、この人は体制側の人だから、ということでもう**聞く耳持てない自分**がいるのです。けれど、落ち着いてよく聞くと「ああ、この人、こんなことも言うんだな」と思えることもあるのです。私たちは、いや私は、百かゼロか、白か黒か、と考えたがるのです。**裁判官になってしまっているのです**。これは危険だなと思いました。確かに政治がとんでもないような状況にある時、アクションを起こすことも大事だと思います。しかし、それで特定の人間を言葉や心の中で殺すようなことは、イエス様をも再び殺していることではないかと思えます。あの十字架は誰のためだったのか。私たちがどういう所から救われ、赦されたのか、そのことで主は何を犠牲にして下さったのかを心に刻む時、自分の心の暴力に気付かされ、主よ、憐れんで下さいと祈らされます。**この世界を支配されているお方は、主です**。私ではありません。

散らされて行った人々は、サマリア人に「福音」を語りました。その「福音」とは、上から下に語るというものではないと思うのです。「福音」というのは、「土台」であって、一緒にこの上に立つものだと思います。隔たりや階層がないから「福音」、良き知らせなのです。ここだったら一緒に生きることが出来る。これが本当の意味の、

信仰者の「新しい生活様式」だな、と思わされるのです。

[結] 主イエスが下さる「新しい生活様式」

今、「新しい生活様式」という言葉が盛んに言われますね。これは一般には、ウィルス感染予防のために配慮した生活スタイルという事でしょう。それも確かに大事です。けれども主イエス様が下さる「新しい生活様式」とは、もっと根本的な事、本当の意味で、心安らかに「共に生きる」ということではないかと思います。

最近 TV で紹介された絵本で、凄いなあと思ったのは、『へいわとせんそう』という絵本で、Noritake さんというイラストレーターの方の絵と、詩人の谷川俊太郎さんの言葉で「平和」の絵と「戦争」の絵が見開きで対比して描かれている本です。例えば「へいわの父」では子どもを馬乗りさせているお父さんが、「せんそうの父」では銃を抱え武装しているお父さんが描かれています。或いは「へいわのかぞく」では、皆で食卓を囲む画、「せんそうのかぞく」の画はそこに誰もいないで、食器が落ちて割れています。けれども最後に「みかたの赤ちゃん」と「てきのあかちゃん」というページがあり、スヤスヤと眠っている**全く同じ赤ちゃんの姿**が描かれています。ハッとさせられます。あれっ、私たちは「敵」とか「味方」とかを心で勝手に作り出し、それにいつの間にか支配されてしまっているのではないだろうか、と問われます。

イエス様の福音というものは、**和解の福音**です！私たちの偏った目や心を解き放ち、**私たちの命そのもの**を祝福しているのが福音です。それが神様の心、イエス様の心です。ユダヤもサマリアも日本もないのです。神様は、社会的な環境、家庭的な環境、持って生まれたものに左右されません。**全ての者を等しく愛して**下さっています。その証拠が**十字架**ではないでしょうか。「私は神様が命を捧げられるほどに愛されている」。それが分かったら、私たちはどんな場所でも腰を据えて生きて行けると思います。

はじめに「静かな戦い」ということを申しました。そうです。腕力や武力ではない、クリスチャンたちの戦いは、「祈り」です。聖霊に導いて頂くことだと思います。その中で私たちは本当の平安を与えられ、自由にされて、だからこそ、「敵」など実はいない、隣人と共に生きることが出来るのではないのでしょうか。「**世に勝つ者とは誰か。イエスを神の子と信じる者ではないか**」(一ヨハネ 5:5 口語訳)。

お祈り致します。

神様、私たちの心の中を探して下さい。私の中の悪しき思いを、あなたの愛によって砕いて下さい。あなたは全ての者のためにご自身の命を捧げて下さいました。その福音が、私たちを、新しい生き方へと導いて下さいます。使徒言行録は、今の私たちにつながっています。今日の私たちの生活の只中に、また人間関係の只中に、あなたの聖霊の息吹を送って下さい。イエス・キリストの御名によって祈ります。アーメン。